

認知言語学の基本的言語観に基づく日本語の中間構文の研究の必要性

著者	千 昊載
雑誌名	東北大学言語学論集
号	28
ページ	15-29
発行年	2019-12-01
URL	http://hdl.handle.net/10097/00130481

認知言語学の基本的言語観にもとづく日本語の中間構文 研究の必要性

チョン・ホ・ジェ
千昊載

キーワード: 認知言語学、中間構文、主語の一般的属性、非能格自動詞構文

1. はじめに

日本語には中間構文というものがある。中間構文は形態的にみると、次の例に見られるようにその述語が他動詞形でもなく受動形でもない、中間形をとる構文のことを言う。

- (1) a. 太郎が花子を笑わせた。(他動詞構文)
- b. 花子はよく笑う。(中間構文)
- c. 花子が笑った。(非能格自動詞構文)
- d. 花子が太郎に笑わせられた。(受動構文)

ところが、例文(1)に見られるように、述語が他動詞と受動形の動詞の中間形をとるものは2つある。にもかかわらず、例文(1b)を中間構文とし、例文(1c)は非能格自動詞構文とされる。両構文の述語形が同じ音声形をとるにもかかわらず、互いを区別するのは両構文がそれぞれ異なる統語・意味的な特徴を有するとされるからである(後述する)。千昊載(2009)以外には非能格自動詞構文と中間構文を区別した研究はいまだ見当たらない。

例文(1b)の中間構文は特定の個人「花子」の属性を記述するものであるが、千昊載(2009:68)によれば、「この種類のシーツはすぐ汚れる」に見られるように、無生物主語「シーツ」の属性を記述する中間自動詞構文も存在すると考えられている。千昊載(2009:68)では例文(1b)を「中間自動詞構文1」として、後者は「中間自動詞構文2」として区別するが、基本的に主語の属性を記述するという共通点をもつので中間構文として一括する。しかし、本稿では論議の便宜を図るため、前者の中間構文を中心に論を進める。

中間構文を例示する「花子はよく笑う」に見られるように、その述語である「笑う」は非能格自動詞構文を例示する「花子が笑った」の述語(非能格自動詞)の「笑う」と全く同じ音声形をとるものの、中間構文は非能格自動詞構文と異なり、対応する他動詞文をもち、主語

は対応する他動詞文の目的語である。中間構文では動作主項(agent argument)が統語上明示されえないが、意味的にその存在は含意される。さらに中間構文の述語である中間動詞は状態動詞(stative verb)であり、主語の一般的属性を記述し必然的に難易副詞の補助を受ける。中間構文のこのような統語的・意味的働きは例文(1c)の非能格自動詞構文には見られないので、中間構文を独自の統語・意味的特徴をもった独立構文とみなす強力な根拠となり得る。このような違いにより、例文(1b)の述語「笑う」と例文(1c)の述語「笑う」は同音異形として形態的にも区別されると考えられている(第3節で詳述する)。

本稿では認知言語学の基本的言語観にもとづいてこれまで取り扱われていない中間構文の新たな面を探ってみたいと思う。もちろん、英語の中間構文の研究ではあるものの、認知言語学の観点から中間構文を分析した研究が数多くある。しかし、認知言語学の基本的言語観にもとづいて中間構文、中間構文と非能格自動詞構文、ひいては認知言語学の特徴的言語観の妥当性を追い求めた研究は管見の限り見当たらない。

本稿の目的は次の通りである。まず第1には認知言語学の基本的言語観を概略的に紹介する(2.1節)。それから認知言語学的観点で英語や日本語の中間構文を分析した幾つかの先行研究を見てみたい(2.2節)。第2には、先行研究によって明らかになった日本語の中間構文の形態・統語・意味的特徴をまとめる(第3節)。第3には、認知言語学の基本的言語観にもとづいて、これまで解明できなかった日本語の中間構文の新たな特徴について述べる(第4節)。最後に、形態的・統語的・意味的に類似する非能格自動詞構文が認知言語学の基本的言語観により中間構文とははっきり区別されることを述べる(第5節)。これらの研究目的を達成することにより、先行研究では解明できなかった、中間構文の新たな事実を明らかにするだけでなく、認知言語学の基本的言語観の妥当性の裏付けが期待できる。

2. 認知言語学の基本的言語観と先行研究の概観

本節では、認知言語学の基本的言語観を紹介し、認知言語学の観点から英語や日本語の中間構文を分析した幾つかの先行研究を見てみたい。

2.1 認知言語学の基本的言語観

本節では認知言語学の基本的言語観にもとづいて中間構文を分析する前に、まず認知言語学の基本的言語観について紹介したい。以下で挙げる例と説明は基本的に尾谷昌則・二枝美津子(2011:33-52)から引用したが、一部の例と説明には筆者の私見が加わったものもある。

認知言語学は対象に対する人間の認知的能力や認知パターンの側面から言語を研究する分野である。認知言語学は例えば使役構文を分析する時、1つの言語単位(モジュール)のみを対象としない。すなわち、形態論→統語論→意味論→語用論のように、常に複数の言語単位

を視野に入れて分析する。

認知言語学では構文を分析する際、重視する基本的言語観が幾つかあるが、まず第一に、認知言語学では「記号的言語観」と「動機づけ」の概念を重視する。認知言語学でいう記号的言語観は言語形式と意味の結び付きが恣意的ではない、必然的であると考えるところにその特徴がある。一般言語学では言語形式と意味は類縁性をもたない、すなわち恣意的なものとなすが、認知言語学ではそうではない。例えば、{staple}と{-er}はそれぞれ恣意的かもしれないが、{stapler}はその意味が予測可能であることから必然的であると言える。さらに、ある動機が与えられて{staple}と{-er}が互いに結び付き{stapler}となったことが十分窺える。認知言語学ではこのような言語の記号的性質(必然性・動機づけ)が語彙のみに限らず、句→節→文にも反映するとされている。

第二に、認知言語学では構文を分析するときに、「経験基盤主義」と「統合的認知主義」の立場を重視する。言語で描写された世界が実際の世界を完全に捉えていることはほぼ不可能である。例えば、「これは机だ」は状況を客観的に描写したものであるのに対し、「戸田先生は鬼だよ」では認知する主体が認知主体(話者)の経験にもとづいて構築された認知的世界が介在している。前者は状況レベルの意味(客観的意味)、後者は認知レベルの意味を描写するが、このように認知言語学は構文を状況レベルの意味と認知レベルの両方を考慮した経験基盤主義と統合的認知主義的観点にもとづいて構文を分析するところにその特徴がある。

第三に、認知言語学では構文を分析する際、「特定性」や「カテゴリー化の能力」という概念を重視する。人間は事物を認知する時に一つの方式のみを取ることはない。例えば、われわれがある道具を認知するときに、「claw hammer→hammer→tool→object→thing」の順に大きいカテゴリーに入れて認知することもでき、逆に「thing→object→tool→hammer→claw hammer」の順に小さいカテゴリーに入れて認知することもできる。小さいカテゴリーに入れば入るほど特定性(specificity)が強くなり、同時にカテゴリーも具体化する。大きいカテゴリーはその反対である。したがって、特定の構文が発話されとか作成された場合、その構文には認知主体の特定性やカテゴリー化の能力が常に含まれていると考えることができる。

第四に、認知言語学では構文を分析するとき「プロトタイプ」と「スキーマ」の概念を重視する。まず、プロトタイプ(prototype)とは、幾つかの事例のなかで最も典型的な事例を指示することを言う。またスキーマ(schema)とは、あるカテゴリーに属する事例の相違点は捨象し、共通点のみを抽出し抽象化したものである。例えば、「リンゴ、桃、蜜柑、マンゴー、ラズベリー」などはすべて果物の範疇に属するが、「りんご」や「桃」は日常生活で

簡単に見つけられるのでプロトタイプに当たる。一方、「りんご、桃、蜜柑、マンゴー、ラズベリー」はすべて木の実であり甘味と、ある程度の酸味をともに持つという共通点があるのでスキーマとされる。

第五に、認知言語学では構文を分析する際、「前景化(図)」と「背景化(地)」という概念を重視する。例えば、「ドイツ軍が町を破壊した-町が(ドイツ軍によって)破壊された」で言えば、前者の他動詞構文では対象(町)の状態変化を直接にもたらした主語(動作主)の「ドイツ軍」が前景化した反面、後者の受動構文ではもともとの主語(動作主)は背景化している。一方、他動詞構文の目的語(町)は受動構文では主語の位置を示すことで前景化していると言える。動作主が表示されない受動構文では他動詞構文に比べて情報量が少ないと言える。

第六に、認知言語学では構文を分析するとき、「ベース(base)」と「プロフィール(profile)」の概念を重視する。ベースは対象の状態変化に関与したと認識した全体領域を指す。これに対して、プロフィールは全体の中での特定の領域のみを指す。例えば、「ドイツ軍が町を破壊した」で言えば、この他動詞構文は町の状態変化に関与したと認識した全体領域を描写したためにベースとされる。この反面、「町が破壊された」は「町」の状態変化という特定領域のみが描写されたので、プロフィールとされる。このことから、ベースとプロフィールは認知領域(domain)の違いを示すと考えることができる。

第七に、認知言語学では構文を分析するとき、「トラジェクター(trajector)」と「ランドマーク(landmark)」の概念を重視する。このことは認知主体が認識した出来事の全体(ベース)が言語化しないことと関係がある。つまり、プロフィール化したものだけが言語記号に変換されるとのことである。認知言語学で言う主語は出来事や状態変化のなかで著しく認知された関与者、すなわちトラジェクターのことを言う。ランドマークはその次に認知されるものである。例えば、「The bike is near the house」で「bike」はトラジェクターであり、「house」はランドマークである。さらに「ドイツ軍が町を破壊した」では「ドイツ軍」がトラジェクターであり、「町」はランドマークである。「町が破壊された」では「町」がトラジェクターとなる。

最後に、認知言語学では構文を分析するとき、「メンタル・スキャニング(mental scanning)」の概念を重視する。認知言語学では認知主体が外部世界から入ってくるすべての情報を同時にとらえられないと考える。つまり認知主体は特定の出来事を時間軸に従い漸次的にスキャニングする過程を経て認知する。例えば、「太郎がプールで泳いだ」を発話(描写)した認知主体は一定の時間軸に沿って進行した出来事(泳いだこと)を漸次的にスキャニングする過程を当然経たと考えることができる。このことは「太郎が3時間泳いだ」のよ

うに一定の時間軸を表す「3時間」が「泳いだ」との共起を許容することからも裏付けられる。しかし、このことは継続動詞のみに当てはまるもので、「死ぬ」のように瞬間動詞には、例えば「*太郎は3時間死んだ」に見られるように「3時間」は共起が許容されえない。認知言語学では前者の場合を「連続スキニング」、後者の場合を「一括スキニング」を通して構文が成立したとみている。

2.2 先行研究の概観

英語、フランス語、ドイツ語ではあるが、認知言語学的な観点から中間構文を分析した代表的な研究としては尾谷昌則・二枝美津子(2011)がある。尾谷昌則・二枝美津子(2011:151-153)によれば、「*This book sells well by the man」に見られるように、中間構文では前置詞「by」をもって特定の動作主「man」を明示することはできないが、その存在は含意されているという。含意されている動作主は不特定一般人であり、その動作主は背景化されている。中間構文では主語の属性が焦点を受けるので、あえて不特定一般人を示す必要がないのである。しかし、尾谷昌則・二枝美津子(2011)は認知言語学の観点にもとづいて英語、フランス語、ドイツ語の中間構文を分析したものではあるが、中間構文で動作主が背景化しているという指摘を除けば、その他はすでに数多くの先行研究で指摘されているので中間構文の新たな面を明らかにしたとは言えない。

次に本多啓(1997、1999、2013)は例えば「Bureaucrats bribe easily」に見られるように、英語の中間構文が表す主語の属性は知覚者の探索結果により得られた情報であり、中間構文はその情報がどのように発揮されるかを常に記述せねばならないので「easily」や「nicely」のような副詞を用いなければならないと主張する。さらに意味上含意されている動作主が不特定一般人と解釈される理由は中間構文と観察点の公共性が密接に結びついているからであると言う。

千昊載(2019)は基本的に本多啓(1997、1999、2013)の認知言語学的観点(生態心理学的観点)に立って日本語の中間構文を分析しているが、千昊載(2019)では日本語の中間構文に働いている公共性の概念を「知覚者」「観察点」「五感システム」などへ拡大、「時間」の超越という概念を視野に入れて綿密に分析を行っている点で本多啓(1997、1999、2013)の研究とは一線を画している。

このように認知言語学の観点にもとづいて中間構文を分析した先行研究はあるが、2.1節で述べたように認知言語学の基本的言語観にもとづいて中間構文を分析した研究はいまだ見当たらない。さらに本稿では認知言語学のフレームのなかで中間構文の新たな面を探り出すと同時に、中間構文を通して認知言語学の基本的言語観の妥当性や分析の効用性をも強調しているという点で独自性がある。

3. 中間構文の形態的・統語的・意味的特徴

本節では、認知言語学の基本的言語観にもとづいて中間構文を分析する前に、先行研究によって明らかになった中間構文の諸特徴についてみてみたい。以下で提示する例と説明はすべて千昊載(2019)による。

人間を主語とする日本語の中間構文を分析した研究として千昊載(2019)の研究が挙げられる。千昊載(2019:136-137)によれば、中間構文の述語である中間動詞の形態的特徴として「友子はよくすねる」「花子はすぐ驚く」のように一般の自動詞形をとるもの、「太郎はすぐ遠慮する」「徹はよく爆笑する」のように漢語動詞+する形をとるもの、「優はすぐ悔やむ」「雪子はよく懐かしむ」のように形容詞の語根をもつもの、「明はすぐイライラする」「勝はしょっちゅうヒヤヒヤする」のように擬声語・擬態語+する形をとるもの、「七海はすぐ知りたがる」「結衣はすぐ恥ずかしがる」のように「～(た)がる形」をとるものがあるとしている。¹⁾

これらの中間動詞の形態は非能格自動詞形と同一の音声形をとる。例えば中間構文を例示する「あの子供はすぐあばれる」と、非能格自動詞構文を例示する「子供があばれた」の下線を付した述語形は同じ音声形である。にもかかわらず、中間構文と非能格自動詞構文がそれぞれ区別されると考えるのは、それぞれの構文が統語的に、意味的に区別されるからである。このことから中間動詞と非能格自動詞の形態は同音異形とされる。これは「食べさせる」と「合わせる」のように、同じ「動詞の語幹+させる」をとるにもかかわらず、前者は使役動詞、後者は他動詞として統語的に意味的に区別するのと同じ理屈である。

それでは、中間構文と非能格自動詞構文が区別されると考える幾つかの根拠を示しておこう。まず第一に、中間構文は対応する他動詞構文(使役構文も含む)を有するが、非能格自動詞構文はそれを有しない。例えば、中間構文を例示する「あの子はすぐあばれる」は「太郎があの子をあばれさせた」に見られるように対応する他動詞構文を有するが、非能格自動詞構文はそうでないと考えるのは、中間構文が非能格自動詞構文とは異なり、主語の属性の発揮を呼び起こす何かのきっかけを前提としているからである。第二に、中間構文は対応する他動詞構文を有するために、対応する他動詞構文の目的語が中間構文では主語となる。これ

1) 中間構文の述語である中間動詞がこのように複数の形態をとることについては今後詳しく考察する必要があるように思われるが、천호재(千昊載, 2008:91)の考え方に従えば、中間構文の統語的・意味的制約に再調整(adjustment)が加えられた結果、中間動詞の形態が獲得するとみている。つまり、一般の自動詞形がなければ漢語動詞+する形をとるものが、漢語動詞+する形がなければ、形容詞の語根をもつものがそれぞれ中間動詞になると考えている。

に対して、非能格自動詞構文は対応する他動詞構文をもたない。したがって、中間構文の主語には被動作主(patient)の意味役割が割り当てられるが、非能格自動詞構文の主語には動作主(agent)の意味役割が割り当てられる。第三に、中間構文では「*あの子は太郎によってすぐあばれる」に見られるように、動作主項(太郎)が統語上明示されえないが、意味上その存在は含意されるとされる。しかし、非能格自動詞構文では動作主項が統語上明示される。第四に、中間構文は状態化の操作を受ける状態構文であり、その述語である中間動詞は状態動詞となるが、非能格自動詞構文はそうではない。このことは「*梢はすぐ悲しんでいる」「*梢は一生懸命に悲しむ」「*梢がすることはすすねることである」「*梢は毎日すぐ悲しむ」「*梢は教室ですぐ悲しむ」「*梢は演技をするためにすぐ悲しむ」「*梢さん、すぐ悲しみなさい」「*次郎はすぐ興奮する。それは昨日起こったことである」などに見られるように、中間構文は進行形、様態副詞、疑似分裂文、単純反復現在時制、場所副詞句、目的節、命令形、過去を表す文との共起制約を有することから裏づけられる。しかし、非能格自動詞構文には中間構文のような共起制約は見られない²⁾。最後に、中間構文では「優はすぐ悔やむ」「雪子はよく懐かしむ」に見られるように様態副詞や難易副詞「すぐ」「よく」が必須的に用いられるが、非能格自動詞構文では随意的に用いられる。

以上の中間構文の形態的、統語的、意味的特徴は中間構文の典型的特徴であり必然的特徴であるが、非能格自動詞構文において中間構文の諸特徴は典型的特徴でも必然的特徴でもない。このことから、中間動詞と非能格自動詞が同一の音形をとるにもかかわらず、統語的に意味的にそれぞれ区別されると考えるのである。以上述べた日本語の中間構文の諸特徴は千昊載(2009, 2019)をはじめ、英語の中間構文の分析により明らかになったものであるが、以上述べた諸特徴をもつ中間構文を認知言語学の基本的言語観にもとづいて中間構文の新たな面を探ろうとした研究はまだ見当たらない。

4. 認知言語学の基本的言語観と中間構文

本節では、第3節で述べた認知言語学の基本的言語観にもとづいて中間構文を分析したい。さらに中間構文こそ認知言語学の基本的言語観の妥当性を十分に裏づけられるということを述べたい。

2) 例えば、「葵はよく働いている」「葵は一生懸命に踊っている」「葵がすることは歌うことである」「葵は毎日夜遅くまで働く」「葵が舞台の上で踊っている」「講演を聞くために生徒たちが講堂に集まった」「娘よ、歩け」「葵が生まれてはじめて立った。それは今朝起こったことである」に見られるように、非能格自動詞構文は進行形、様態副詞、疑似分裂文、単純反復現在時制、場所副詞句、目的節、命令形、過去を表す文との共起制約がない。cf. 千昊載(2019:140)

4.1 中間構文と記号的言語観・動機づけ

日本語の中間構文に認知言語学の基本的言語観が忠実に反映されており、それゆえ中間構文が日本語に存在するとみる第一の根拠は、中間構文を構成する表現形式と意味が必然的に結びついているということである。中間構文に与えられている動機づけは、主語の属性をいかに伝えるかということである。結論的に言えば、中間構文には主語の属性を伝えるという動機が与えられており、その動機を実現するために諸形式と意味が必然的に結びついている。例えば、中間構文を例示する「花子はよく笑う」の諸形式「花子＋は＋よく＋笑う（＋現在形）」のそれぞれの形式は恣意的かも知れないが、それぞれの意味をもった諸形式間の結び付きは必然的である。具体的に言えば、「花子はよく笑う」は対応する他動詞構文をもち、誰かの行為が原因となり、主語の属性が発揮される可能性をもつ。その可能性は「よく」により容易く実現しうることを記述する。主語の属性は時間の制約を受けずに、一定の条件（原因）が与えられればいつでも実現しうることを中間構文は記述するので、その述語（中間動詞）は常に現在形をとらなければならない。さらに中間構文では主語の属性が焦点を受けるので、主題助詞「は」が結びつく。中間構文ではこれらの5つの形式を通して、第2節でみたような形態的・統語的・意味的特徴が許容されるのである。この必然性により中間構文は形態的・統語的・意味的に類似する非能格自動詞構文とは区別されるとも言える。

以上述べたことをまとめると、認知言語学の基本的言語観、つまり記号的言語観（必然性、動機づけ）にもとづくと、中間構文の特徴を見事に捉えることができる。中間構文を構成する固有の意味をもった諸形式は主語の属性を記述するという動機づけにより必然的に結びついている。このように中間構文を「必然性」や「動機づけ」にもとづいて分析すると、中間構文がなぜ第2節で述べたような形態的、統語的、意味的特徴を持つかがわかる。

4.2 中間構文と経験基盤主義・統合的認知主義の立場

日本語の中間構文に認知言語学の基本的言語観が忠実に反映されており、それゆえ中間構文が日本語に存在するとみる第二の根拠は、中間構文に経験基盤主義や統合的認知主義が忠実に働いているところにある。例えば、非能格自動詞構文を例示する「子供があばれた」は主語の突発的で1回きりの出来事を記述する。経験的な側面で言えば、非能格自動詞構文は主語の属性が現れた瞬間をみた認知主体の陳述をはじめて記述するものであり、それゆえ主語の行為を目撃したはじめての経験を記述したとも言える。さらに「子供があばれた」に見られるように、非能格自動詞構文は状況を客観的に描写した、すなわち状況レベルの意味を記述するものとも言える。というのは、子供の行為をあるがままに描写したからである。

これに対して、中間構文を例示する「あの子供はすぐあばれる」「うちの旦那はよくすね

る」「花子はすぐ遠慮する」「うちの女房はささいなことでよく怒る」「花子はよく悲しむ」「花子はよく喜ぶ」などの例は、認知主体の経験を基盤としており、状況レベルと認知レベル両方の意味を持ち合わせた統合的認知主義的立場をとっていると言える。「花子はよく悲しむ」で言えば、この例は主語の悲しむ場面を認知主体が多数目撃し経験したことにより成り立ったものと考えることができるからである³⁾。また、中間構文を例示する「花子はよく悲しむ」では「悲しむ花子」の状況レベルの意味を認知主体が数回に渡って経験しているために認知レベルの意味が働いていると考えることができる。つまり、中間構文には常に統合的認知主義の立場が含まれている。

4.3 中間構文と特定性、カテゴリー化の能力

日本語の中間構文に認知言語学の基本的言語観が忠実に反映されるとみる三つ目の根拠は、中間構文に特定性(specificity)と認知主体のカテゴリー化の能力が厳密に適用されているところにある。中間構文を例示する「あの子供はすぐあばれる」「うちの旦那はよくすねる」「花子はすぐ遠慮する」「うちの女房はささいなことでよく怒る」「花子はよく悲しむ」「花子はよく喜ぶ」を見ると、限定を表す表現要素「あの」「うちの」が主語に前接していることをはじめ、「花子」にみるように特定個人の名前が主語となっていることがわかる。

第2節ですでに述べた「thing→object→tool→hammer→claw hammer」と同様に、中間構文も「生物→動物→哺乳類→人間→女性→花子」のようにカテゴリーの連続体のなかで、右側のカテゴリー指向性をもつと考えることができる。もし、「子供はよくあばれる」「旦那はよくすねる」「女はすぐ遠慮する」「男はささいなことでよく怒る」「女はよく悲しむ」「子供はよく喜ぶ」に見られるように、限定を表す要素を取り除くか、類一般で主語のカテゴリーを拡大してしまうと、これらの例はもはや中間構文を例示するものとは考えにくい。「男はささいなことでよく怒る」で言えば、もしすべての男が例外なくささいなことでよく怒るとすれば、この文は中間構文ではなく総称文(generic sentence)となってしまう。しかし、これはあまりにも例外が多く存在するために、総称文にはなりにくい⁴⁾。そこで「男はささいなことでよく怒る」は文法的に正しいと言っても意味的に不適格とされる。

しかし、「怒る」という属性が特定人物「あの男」のみに限って発揮されることは十分あ

3) もし、経験に基盤せずにこの例が作られたとすると、この例には「偽」の真理値が与えられていると言える。そこで文法的に正しいと言っても意味的には不適格とされる。

4) あるもの(人間)に対する認知主体のより長期間に渡る観察もしくはすぐれた洞察力が前提とならない以上、総称文を得ることはなかなか難しいと思われる。

りうる。そこで「あの」という限定詞を結びつけ、ある人物の属性を伝える文が必要であるが、それが中間構文なのである。このことから、中間構文を発した認知主体は、特定性やカテゴリー化の能力を最大限発揮したものと考えることができる。このように中間構文は認知言語学の基本的言語観、つまり「特定性・カテゴリー化の能力」というものを忠実に具現しており、逆にその基本的言語観の助けにより中間構文の存在が見事に捉えられることがわかる。

4.4 中間構文とプロトタイプ、スキーマによる拡張

認知言語学の基本的言語観が日本語の中間構文に忠実に反映されるとみる4つ目の根拠は、中間構文にプロトタイプとスキーマの概念が見事に当てはまるところにある。中間構文には3.2節で述べたように、経験基盤主義や統合的認知主義が忠実に働いているために意味論的に言えば「真」という真理値が与えられる。そこで、中間構文は一般的に真であることを記述する総称文というプロトタイプに最も近い構文であると考えることができる。一方、中間構文に与えられるスキーマは、例えば中間構文を例示する「花子はすぐ興奮する」、「花子はすぐ遠慮する」「花子はすぐ泣く」に見られるように、すべて「主語の一般的属性」と言える。つまり、中間構文はそれぞれ異なったものを記述するが、すべて主語の一般的属性を記述する点で共通点をもつと考えることができる。

4.5 中間構文と前景化、背景化の分化

認知言語学の基本的言語観が中間構文に忠実に反映されているとみる5つ目の根拠は、中間構文に前景化や背景化の概念がよく当てはまるところにある。例えば、中間構文を例示する「花子はすぐ興奮する」「花子はすぐ遠慮する」「花子はすぐ泣く」はそれぞれ「誰かが花子を興奮させた」「誰かが花子を遠慮させた」「誰かが花子を泣かせた」という対応する他動詞構文をもつと言える。というのは、中間構文が何かの原因により、主語の一般的属性が現れる可能性を記述するからである。したがって、中間構文では対応する他動詞構文の主語(誰か)が背景化する一方、他動詞構文の目的語が前景化すると考えることができる。他動詞構文の主語に割り当てられる意味役割は「動作主」であり、厳密に言えば不特定多数動作主である。中間構文では主語(被動作主の意味役割が与えられる)の属性が焦点を受けるために、そもそも他動詞構文の目的語であったものが主語となることで前景化が起こる。また主語であった動作主は中間構文では背景化する。しかしその存在は意味的に含意される。

4.6 中間構文とベース、プロフィール

認知言語学の基本的言語観が中間構文に反映されているとみる6つ目の根拠は、中間構文

にベースやプロフィールという概念がよく当てはまるところにある。例えば中間構文を例示する「花子はすぐ興奮する」の主語「花子」に見られるように、「生物→動物→哺乳類→人間→女性→花子」の順に具体的にプロフィール化していくことがわかる。このことから中間構文を例示する「花子はすぐ興奮する」は最小限「女性」というベース上で、ある一つの個体をプロフィール化して作られた構文であると考えることができる。

4.7 中間構文とトラジェクター、ランドマーク

中間構文に認知言語学の特徴的言語観が反映されているとみる7つ目の根拠は、中間構文にトラジェクターやランドマークの概念がよく当てはまるところにある。中間構文は人間やものに属する複数の属性のなかで、有意味であるとされるある属性を言語記号化した構文である。したがって、中間構文のトラジェクターは主語であり、ランドマーク（他動詞構文の主語、動作主）は文表面に現われない。このことは3.5節でも見たように中間構文に対応する他動詞構文の目的語が中間構文では前景化する反面、他動詞構文の主語は中間構文で背景化するのと軌を一にする。さらにこのことは認知主体（話し手）が中間構文を発話する（記述する）時、主語の属性の発揮にかかわるすべてのものをそのまま言語化しないということをも意味する。つまり、中間構文では主語の属性の発揮可能性において一番目立つトラジェクターのみに焦点が置かれると言える。

4.8 中間構文とメンタル・スキヤニング

中間構文に認知言語学の基本的言語観が反映されているとみる最後の根拠として中間構文にメンタル・スキヤニングという概念がよく当てはまることが挙げられる。中間構文が聞き手に提供する主語の属性は認知主体が一瞬で認知したものではなく、一定の時間軸に沿って漸次的にスキヤニングするプロセスを経て得られたものである。つまり、普段の主語が行う行動を認知主体がメンタル・スキヤニングで記憶し、その記憶をもとに主語の行動を連続的にメンタル・スキヤニングする方式で発話したと考えることができる。例えば、中間構文を例示する「花子はすぐ興奮する」は認知主体が主語の行為を連続スキヤニングすることで作られたものと考えることができる。このことは中間構文に「すぐ」や「よく」のような副詞が必ず用いられることから裏付けられる。副詞「よく」は「容易く」という意味もあれば、「頻繁に」という意味もあるが、いずれにせよ、この副詞の存在から認知主体のメンタル・スキヤニングが多数に渡って行われたことがわかる。

5. 中間構文と非能格自動詞構文の違い

本節では、第3節で述べた認知言語学の基本的言語観を通して中間構文と非能格自動詞構

文との違いを述べる⁵⁾。まず第一に、記号と意味の必然性、動機づけによる違いである。中間構文には主語の属性記述という動機づけが認められるが、非能格自動詞構文はそうではないか、中間構文ほど動機づけが充分与えられているとは言えない。すでに述べたように、中間構文は対応する他動詞構文をもち、その結果目的語が主語となり、主題助詞「は」、副詞、動詞の現在形が1つのセットとして互いに緊密に結びついている。このことはすべて中間構文の諸形式が主語の属性を記述することから得られる必然的帰結である。これに反し、非能格自動詞構文は対応する他動詞構文をもたない(つまり基底構造と表層構造が同一であると考えられる)。例えば、非能格自動詞構文を例示する「花子が笑った」は対応する他動詞構文をもたないために、主語の花子が意図的に笑ったことを記述すると思われる。つまり中間構文では主語の属性が誰かの関与により発揮されるので主語の行為は非意図的でなくてはならないが、非能格自動詞構文では対応する他動詞構文をもたないので主語の行為が意図的であるとしかいえない。非能格自動詞構文が主語の意図的行為を表すために、主語には動作主の意味役割が割り当てられる。そこで非能格自動詞構文では動作主が意味的に含意されない。さらに非能格自動詞構文では「花子が笑った」に見られるように、主格助詞と過去形が用いられている。そこで非能格自動詞構文は主語の属性よりは1回きりの出来事を記述すると考えることができる。このことから、非能格自動詞構文には中間構文のもつ形式や意味との強い結束力が見られないか、あるいは弱いことがわかる。

第二に、経験基盤主義と統合的認知主義による違いである。中間構文には非能格自動詞構文とは異なり、経験基盤主義と統合的認知主義が強く反映される。中間構文は例えば「あの子はすぐあばれる」に見られるように、主語の属性を観察した情報が認知主体の経験を基盤とした認知レベルの意味が伝えるものであるのに対し、非能格自動詞構文は例えば「子供があばれた」に見られるように、主語「子供」の行為を出来事化して即興的に捉えるために非経験基盤主義であり状況レベルの意味しか記述しないと言える。

第三に、特定性やカテゴリ能力による違いである。中間構文を例示する「花子はすぐ興奮する」では、主語が特定の個人(花子)となっている。このことから中間構文は「特定性・カテゴリ化の能力」というものが充実に具現しているのに対して、「子供があばれた」、「アメリカ人乗客たちが千歳空港であばれた」に見られるように非能格自動詞構文では主語が必ずしも特定の個人ではなくても良いことから、「特定性・カテゴリ化の能力」というものが中間構文ほど具現しているとは言えない。

第四に、プロトタイプとスキーマによる違いである。中間構文は総称文というプロトタイ

5) 千昊載(2919:150-154)では生態意味論的な観点(知覚の能動性、知覚システム、アフォーダンスとエコロジカル・セルフ、冗長性・知覚学習、観察点の公共性)にもとづいて中間構文と非能格自動詞構文との違いを述べている。

プに近接した構文であり、個体主語の属性を記述するというスキーマをもつ。これに反して、非能格自動詞構文を例示する「子供があばれた」、「アメリカ人乗客たちが千歳空港であばれた」に見られるように、1回性の出来事を記述するので総称文のプロトタイプからかなりかけ離れていると言える。さらに非能格自動詞構文では中間構文に見られるようなスキーマを確定しにくい不可能である。

第五に、前景化、背景化による違いである。中間構文では対応する他動詞構文の目的語の前景化と主語の背景化が実現している。これに反して、非能格自動詞構文では対応する他動詞構文を持たないために中間構文に見られる前景化や背景化は起こらない。このことから中間構文において前景化や背景化は典型的な特徴であり必然的な特徴であるが、非能格自動詞構文において前景化や背景化は典型的な特徴でも必然的な特徴でもないことがわかる。

第六に、ベース、プロファイルによる違いである。中間構文を例示する「花子はすぐ興奮する」は「生物-動物-哺乳類-人間-女性-花子」のカテゴリーのなかで大きくは生物、小さくは女性をベース化した上で最も具体的で限定された個体(花子)をプロファイル化したものと考えることができる。これに反して非能格自動詞構文を例示する「アメリカ人乗客たちが千歳空港であばれた」では中間構文に見られるような厳密なプロファイルは見られない。しかし、「花子が笑った」も非能格自動詞構文にも中間構文と同じプロファイル化を確認できるが、このことは1つの例外というよりも具体的で限定された個体のプロトタイプ化が中間構文では典型的な特徴であり必然的な特徴であるが、非能格自動詞構文では随意的特徴であると考えればよい。

第七に、トラジェクター、ランドマークによる違いである。中間構文は特定個人に内在している複数の属性の一つを認知主体が有意味な属性と判断し、それを言語記号化したものである。このとき、有意味な属性を所有した人は主語であり、それは同時にトラジェクターである。一方で、主語の属性を誘発する不特定多数一般人は意味上含意され、それは同時にランドマークとなる。これに反し、「アメリカ人乗客たちが千歳空港であばれた」に見るように非能格自動詞構文は対応する他動詞構文をもたないために、主語のアメリカ人乗客をトラジェクター、「千歳空港」をランドマークと考えることができる。つまり、非能格自動詞構文ではランドマークが中間構文と異なり可視的でありうる。

最後に、連続スキヤニングによる違いである。中間構文が記述する主語の属性は認知主体が一定の時間軸に沿って漸次的にスキヤニングすることによって得られたものである。これに反して、非能格自動詞構文を例示する「子供があばれた」は主語の1回きりの突発的な行為を出来事化して記述しているために、そこに認知主体が一定の時間軸に沿って主語の行為を漸次的スキヤニングしたと考える根拠は全くない。むしろ一括スキヤニングを通して構文

が成立したと言える。

6. おわりに

英語をはじめ、日本語の中間構文はこれまで言語の形式的側面(統語・意味)にもとづいてその構造と機能が解明されてきた。前述したように中間構文は対応する他動詞構文をもち、その主語は対応する他動詞構文の目的語であり、中間構文では動作主が統語上明示されえないが、その存在は意味的に含意される。さらに中間構文は状態化の操作を受け、その帰結として述語の中間動詞は状態動詞(stative verb)となる。さらに、中間構文では主語の一般的属性が記述され、難易副詞が用いられる。これ以上、中間構文の形式的側面を記述するのはほぼ不可能である。

しかし、認知意味論の基本的言語観にもとづくと、中間構文の形式的側面の分析ではなかなか捉えられない中間構文の新たな面が明らかになった。まず中間構文はもっぱら主語の属性のみを記述しようとする動機が与えられているために、中間構文に生起するすべての形式とそれぞれの意味との結びつきは必然的であり、互いに強い結束力をもつ。第二に、中間構文が記述する主語の属性は認知主体の普段の経験を基盤として得られた情報である。第三に、中間構文は主語を特定化・カテゴリー化して、それに属する属性を記述したものである。第四に、中間構文は総称文というプロトタイプにはほぼ近接しており、主語の属性を記述するといったスキーマをもつ。第五に、中間構文では他動詞構文の目的語(対象、被動作主)が前景化し、主語(動作主)は背景化する。第六に、中間構文では生物(あるいは女性もしくは男性)というベース上でとても具体的で限定的な部分をプロファイル化する。第七に、中間構文は有意味な属性を所有した主語をトラジェクターしたものである。最後に中間構文は認知主体が一定の時間軸に沿って漸次的に観察するプロセスを経て主語の一般的属性を言語記号化したものである。

次に、本稿では上記した認知意味論の基本的言語観が中間構文には必然的に反映されるが、中間構文と形態的に、統語的に、意味的に類似している非能格自動詞構文には必然的に反映されない点で、中間構文と非能格自動詞構文は互いに区別されることを述べた。

本稿の考察によって認知意味論の基本的言語観が中間構文の新たな事実の解明に有効であり、むしろ認知意味論の基本的言語観の妥当性が裏づけられたといえよう。

参考文献

- 천호재(千昊載, 2008) 「제5장 자발동사와 확산 형태론[第5章 自発動詞と拡散形態論]」
『일본어 자발문의 유형론적 분석[日本語自発文の類型論的分析]』, 한국문화사[韓國文化

社], pp.79-93.

천호재(千昊載, 2009a) 「제4장 일본어의 자동사 구문과 중간 자동사 구문[第4章 日本語の自動詞構文と中間自動詞構文]」『중간구문의 개별언어 분석 및 범언어적 분석[中間構文の個別言語の分析および普遍言語的分析]』, 한국문화사[韓国文化社], pp.67-96.

천호재(千昊載, 2009b) 「제5장 일본어의 총칭문과 중간 구문[第5章 日本語の総称文と中間構文]」『중간구문의 개별언어 분석 및 범언어적 분석[中間構文の個別言語の分析及び普遍言語的分析]』, 한국문화사[韓国文化社], pp. 97-117.

尾谷昌則・二枝美津子(2011) 『構文ネットワークと文法』 研究社, pp. 1-322.

千昊載(2019) 「認知意味論的觀點から見た日本語の中間構文の研究」 『日語日文学研究』 109, pp. 133-156.

本多啓(1997) 「英語の主体移動表現、中間構文、知覚動詞について-生態心理学の觀點から-」 『駿河台大学論叢』 15, pp. 95-116.

本多啓(1998) 「再び英語の中間構文について」 『駿河台大学論叢』 18, pp. 137-156.

本多啓(2013) 『アフォーダンスの認知意味論』 東京大学出版会, pp. 1-331.

(韓國啓明大學人文國際大學日本語學科、副教授、hojae@kmu.ac.kr)

On the Study of the Middle Construction in Japanese through on basic viewpoint of
Cognitive Grammar(by Cheon, Ho-Jae)